

月曜評論

「批林批孔」と中国内政

中国の政治情勢が再び大きく流動化はじめています。この六月中旬以降は、北京をはじめ各地に盛新聞が再現して注目を集めている。北京発、ロイター電(六月十八日)によると、「政治的な、長い暑い夏」を迎えることになりそうだ」と中国の高官たちも語ったといふ。いまのところ、盛新聞は、復讐した旧幹部を批判するもの、革命委員会や地方指導幹部の「批林批孔」運動にたいする「弾圧」を糾弾するもの、革命委員会の「三結合」(幹部・革命大衆・軍)の形骸化を批判するもの、

若干の幹部の横暴や特権化を批判するものなど、総じて大衆の欲求不満を爆発させ、毛主席に直訴したりするものが多いが、そのなかにまじって華国鋒・党

中央政治局員への批判も程世清非公刊文献(そのもの)とも象徴的なのが、林彪の反革命陰謀の書として広く流布されたこと

注目されることである。それにしても、今回の一連の批判は、明らかに脱文革化傾向

来るのだが、その後には、つねに政治の激い糸が絡はれていることも、文化大革命の体験に照して明らかである。それだけに、今回の盛新聞の出現は、中国内政の一つの反映だといわざるを得ず、その帰趨が大いに

組のような指導機関として、今回の「批林批孔」運動の行方を左右することになる。このようなとき、最近の「紅旗」誌には相次いで、周恩来批判を思わせる論文が掲載されており、たとえは「紅旗」七四年第四号の北京大学・清華大学大批判組の論文「孔丘その人」は、「孔家この二男坊は、

一月には党中央政治局員も復讐したの落雁がこのところきつた、……実際には徹頭徹尾の「表面」上は、左傾高潮勢」をとった、……

た。また、「批林批孔」運動に関連して江蘇省や広州市で流血事件や処刑などもあったらしいことが暴露されはじめた。

七二「得」紀要(であろう)などの八〇〇教訓的メディアと並んで、ある場合には、「人民日報」や「紅旗」のような公式の頭

である。いま未確報情報ではあるが、すでに中国共産党中央には「批林批孔弁論室」が設けられ、江青夫人が主任に、張春橋、姚文元の両氏が副主任に、王洪文氏が顧問に就任して「批林批孔」運動を指導していること

も開催できないのか、まず第一にこれらの疑問が解かれねばならないだろう。「批林批孔」運動の行方が、大いに注目されるゆえである。



中嶋 嶺雄

中国における盛新聞は、周知のよすがに、非公式の八〇〇教訓的メディアとして大衆運動や政治的

のことも、盛新聞がしばしば大衆をとりまく真の理由は、中国社判が急急されていると見なすこ

まったくなにも著作がない」と述べて論文や著作の多い毛沢東、劉少奇、林彪との対照的な周恩来を指しているかのようである。また、「紅旗」七四年第五号の余凡署名論文「林彪の反革命的策略の破産」一冊の黒

「東外大助教」